連載

精神障害者から見た人々

Vol.7

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

千葉県 元新聞記者 浜谷真美さん（享年41歳）

読売新聞の親しいA記者から「実は浜谷さんが亡くなりまして」という電話を昨年11月に受け、この突然の悲報に私は「え！　なんで亡くなったの？」と聞き返したが、Aさんの返事はなく、無言の中で彼女の意志による死を直感した。「Aさん！　浜谷さんに私はたいへんな時に支えてもらったのよ。お焼香させてもらいたい」と私は強く言った。Aさんは「そうですね。広田さんの意向に添うよう努力します」と答えた。そのAさんの電話が切れるのを待っていたかのように電話が鳴ったので、気を取り直して出ると、相手は浜谷さんの御遺族だった。

「広田さんですね。実は…真美が亡くなりまして」と言われたとき、私は涙声で「伺いました。真美さんのお通夜か告別式にどうしても伺いたいのですが…。真美さんは私の恩人です」電話の向こうも涙声で「ありがとうございます。ぜひ来てやってください。でも遺体は荼毘に付してありますので、お通夜はなく告別式だけなのですが…」と言った。

真美さんの苦悩を打ち明けられていた者のひとりとして、告別式の日、私は彼女の遺影の前で号泣した。御遺族と手を取り合って。

真美さんとの出会いは大阪池田小事件直後。親しい人の紹介で電話が入った。私は「取材に答えるという前提でなく、お会いして信頼関係ができたら…という長い目で考えていただき、それでよければ…」と答えた。

そして彼女は我が家へやって来て、二人でいろいろ意見交換したが、それは記事としては出なかった。これが、芯は強いが心やさしい彼女との信頼関係のスタートの日だった。

その直後、厚労省（当時）精神保健福祉課より〝法務省との重大な犯罪を起こした精神障害者の処遇に関する合同検討会〟の参考人の依頼を受けた。2001〈平13〉年7月の合同検討会の予定だったが、世論が過熱していたこともあり、「延期してほしい」と厚労省にお願いしたところ承諾されて、私の意見陳述は9月に延びた。そして、もうひとつの依頼が電話で入った。「国の委員に入ってほしい…」。私は迷わず受諾した。この時、ある仲間は「それは国の飴と鞭作戦だ！」と言った。

それから私に対する「合同検討会に出ないで」という声や神奈川県職員からは「広田さんの活動には何の関心もない」と言われて、管理職までが「ここはアメリカでもイギリスでもない儒教の国、日本だ。あなたの発言や書いていることは100％正しいけど、あなたが出ていることすなわち問題だ…」等と言われ、母の死後でもあり、心身の限界を感じ、参考人を断念せざるを得なかった。よく死ななかったと思う。

浜谷さんは「断念は日本の精神障害者全体にとって残念だけれど、自分の生命も大事だものね」と言った。私が「でも鞭を断ったから厚生省は飴も取り消すのかしら…」と言うと「それは別の話だよ。厚労省を、松本課長（当時）を信用したほうがいいよ」と強く言った。

やがて厚労省から正式に〝社会保障審議会障害者部会臨時委員〟の依頼が来て、身近な記者たちに話したところ「広田さんのキャラクターと精神医療サバイバーという肩書きで、史上初めて精神障害者が国の委員に就くのなら、新聞の〝ひと〟欄で取り上げたい」と言われ、浜谷記者は「記者発表の日時と場所は広田さんが決めるのよ」とアドバイスしてくれた。

ひろた かずこ

かつて私は主治医に"文章を書くのが好き"と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

連載

精神障害者から見た人々

Vol.8

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

テレビ局記者　戸来久雄さん（34歳）

94〈平6〉年、当時の主治医だったA医師に日本精神神経学会の話をしたところ、A医師は「私は病院地域精神医学会のほうが好き」と言った。そのことを私が神奈川県立精神保健福祉センターの人に話すと「その学会の会報がここにあるわよ」と教えてくれた。

こうして私は日本病院地域精神医学会（略称、病地学会）の機関誌に出会い、名古屋で開かれる病地学会で演題を募集していることと、当事者の集会があることを知り、演題に応募した。

するとNHKテレビのB記者が電話をくれて、「当事者がこんなに医学会へ出るのは初めてのことなので、発表当日夕方の東海地方のニュースに出てほしい」と依頼された。「名古屋の仲間たちががんばったんだから、名古屋の人に出てもらったほうがいい」と私は断った。

翌日、Bさんから「…名古屋の○○さんにお願いしたところ、『マスコミにたたかれたことがあるので』と断られて…」と電話が入り、私は「大阪の人たちにも声をかけて」と言った。2、3日後、Bさんから「出てほしい人にはみんな断られました。私としては最初から広田さんに出てほしかったので、どうしても出てほしい」と言われ、私は出演を了解した。

ところがその後、Bさんより「広田さんに出ていただくにあたり、親兄弟親戚一同の了解を取って…」という電話が入り、「何のために？」と私が聞くと「上司に言われまして」という答えに「Bさん！　あなたを信頼しているから出るのよ。私の意志で」と強く言うと、Bさんは「そうですよね。おかしいですよね」と言った。

こうして私は〝誰もが安心して利用できる精神医療〟を発表してニュース番組の収録をした。このときの話はおかしいとずっと思っているが、「本人が出たあと、家族のクレームがつくことが多いので、NHKの人が慎重になったんだと思う」と他のマスコミの人から教えてもらった。この逆の場合、どうなのだろうか？

01〈平13〉年に入るとNHKの戸来君から電話をもらい、「うちに来て…」というところから始まり、5月14日に東京第二弁護士会と全家連の共催による〝精神障害者の責任能力〟というシンポジウムに私が出たとき、戸来君も会場に来てくれた。

シンポで私は「弁護士が精神鑑定を法廷戦術に使うので検察官が不起訴にしたがる。精神障害者の犯罪率は低く、起訴率も低い…」というような趣旨の発言をした。終了後、会場にいた法務省の人が飛んできて、「広田さん！　…精神障害者の犯罪はどのぐらいあるかわからないのですよ！」と言った。私は「犯罪白書に数字が出てるじゃない！」と言うと、「そうなんですが…。広田さん！　これからもどうぞよろしく…」と名刺を渡された。この時点で法務省と厚労省の合同検討会が開催されていた。

そして6月8日、運命の池田小事件が起きた。やがて私は社会保障審議会の委員に内定し、12月19日に初めての委員会が開催されるとき戸来君がきて「広田さん！　カメラマンと一緒に来ました。番組で使われるかわかりませんが、収録したいのでコメントを…」と言われた。その夜、戸来君から電話で首都圏ニュースに出たことを知り、親しいタクシーの運転手さんにも「…ラジオのトップニュースで…」と言われた。今も戸来記者は医療や福祉など、精神障害者に関する諸問題に強い関心を持ってくれている。

ひろた かずこ

かつて私は主治医に“文章を書くのが好き”と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

連載

精神障害者から見た人々

Vol.9

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

大阪市／新聞記者　安東義隆さん（42歳）

「フジ（テレビ）、産経、週刊新潮には近づくな」と精神保健福祉業界の人から教えられていた。これらのマスコミは精神障害者にとって、とても厳しい報道をしているという理由からだという。しかし私は、98〈平10〉年に事件記事で容疑者の精神科通院歴を出していた産経新聞横浜版を読んで、横浜支局へ電話を入れた。電話に出たA君は「会いたい…」と言ったので、〝ちゃんこ鍋〟を食べながら意見交換した。

数日後、A君から電話が入り、「…広田さんの話を当直日誌に書いたらデスクから『コラム記事にするよう』言われたので書きたい」と言われ、私は了解した。記事の見出しは〝精神障害者と報道〟で、「病歴を書けば、読者に『精神障害者はみんな怖い』という偏見を植え付けるおそれがある」との内容も載った。

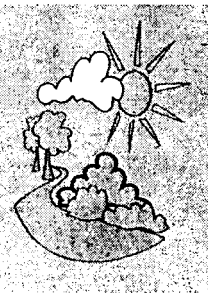
A君はNHKの記者に転職したが、デスクのBさんとの交流が始まった。それはこの年に横浜市の相談員が殺され、容疑者のCさんが精神障害者だったことによる。当時、横浜市精神保健福祉課長の大森さんより「…Cが精神障害者手帳○級を持っていることを産経が書くと言ってるんだけど…」という電話を受けた。そこで私はBさんに電話で「…Cさんが手帳を持っていることを書かないでほしい。精神障害者全体の社会参加が遅れるから」と言った。Bさんは「では、広田さんのコメントを…」と答えた。

こうして私は取材に来たDさんに横浜地検の起訴を支持する「被害者や容疑者本人、そして他の障害者のためにも裁判で事実を明らかに…」という長いコメントをして「載る前に知らせてほしい」と言った。12月26日夜、緊張した声でコメントを読んだD記者は「私の名前も出ます」と言ったので、「私も身体を張って出るのよ。いい記事を期待してるから」と私は言った。〝C容疑者あすにも起訴を〟という見出しの11段にもおよぶ犯行から起訴までの経過を書いたこの記事は産経新聞社社会部長賞を受賞した。

翌99〈平11〉年7月23日に全日空ハイジャック事件が起きて3日後、東京本社社会部に転勤していたBさんより「明日から全日空ハイジャック事件を実名報道しますのでコメントを…」と依頼されたが、お断りした。

その秋、安東さんより「実はハイジャック事件の実名報道を選択したことで連載記事を書くので取材したいのですが、うちのBや業界の人たちに紹介されて…」という電話を受けて、横浜で会った。その時点で安東さんがすでに他の精神障害者を取材したり、私たちの周辺をよく勉強していたのと、インタビュー記事なので記事の事前チェックができるというので次回に取材を受けることを約束して別れた。

取材は横浜で受けたが、まず精神障害者の犯罪について、犯罪の事実があれば他の疾病同様、医療的保護を受けることが大前提で、病気の特性をふまえた取り調べを受け、送検し、起訴する。報道についてはセンセーショナルな報道が結果的に精神障害者を医療から遠ざけてしまう場合もある。社会に望むことは、学校教育で精神の病について教えてほしい。24時間救急の整備、24時間福祉の整備などだった。11月11日、沖縄にいた私の携帯に安東さんより「記事ができたのでFAXを入れたい…」という連絡が入り、ホテルへ送ってもらったが、何の訂正も必要なかった。安東さんとの本当の交流はこれからで、いつも本音で語り合っている。



ひろた かずこ

かつて私は主治医に"文章を書くのが好き"と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

連載

精神障害者から見た人々

Vol.10

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

東京都／テレビ制作者　小倉　朗さん（42歳）

2001〈平13〉年3月。厚生労働省精神保健福祉課のKさんより「…日本テレビでやっている政府公報〝さわやか日本〟という番組で国立精神・神経センターの竹島先生と対談していただきたい。収録日は22日の午後です」という電話を受けた。22日の午後は予定が入っていたので「その日の夜でしたら…」と私は答えた。

Kさんは「それではテレビ局の方から連絡するようにしますので…」と言った。そして番組制作会社の小倉さんから電話が入り「広田さんにお会いしてお話を…」と言われた。「そうですか。では私が医療ミスの注射をうたれて、その副作用のために緊急入院した精神科病院をみてほしい…。その不幸な体験が私の発言や活動の原点ですので」と私は言った。

その時の小倉さんの返事が「ノー」だったら私はテレビ番組出演を断っていた。しかし小倉さんは「病院を案内してくださるんですか！ぜひ伺いたい！」と言った。そこで何日かお互いの都合がいい日を選んで、病院の院長に電話を入れた。

院長は「前に広田さんがラジオ出演した時にラジオ局の人が来たけれど、あの時と同じ程度の説明でいいの？」と言った。「ええ。あの時のように病棟を見てもらい、そして、今、○○病院が抱えている精神科救急等の課題についていろいろお話ししてください。テレビ局の人に対する啓発にもなりますので」と私は言った。

約束の日、小倉さんが六ツ川交番に来た時、「ここが電話でお話ししていた待ち合わせ場所なんですね」と言ったので、「そうなのよ。多くの相談者がここへ来て、私は本当にこの交番の歴代のお巡りさんにお世話になっているのよ」と答えた。小倉さんは「いい話ですね」と言った。そしてタクシーに乗った。

○○病院の院長室で説明を聞いて、私が入院したA3病棟へ。小倉さんは一生懸命、院長に質問し、もう一度院長室へ戻って、再び説明を聞き、私の活動場所へ立ち寄ってから、我が家へ来た。そこで「ああ、広田さんに会ってよかった。本当に勉強になりました」と言った。この言葉を聞いて「小倉さん！　あなたの作る番組にでる気持ちになりました」と私は言った。

小倉ディレクターは「そうですか。それでは早速ですが、テレビの画（え）として、六ツ川交番とこの家は、はずせません」と言われたので、私は神奈川県南警察署の親しい課長に、小倉さんの言葉を伝えると折り返し電話が入った。

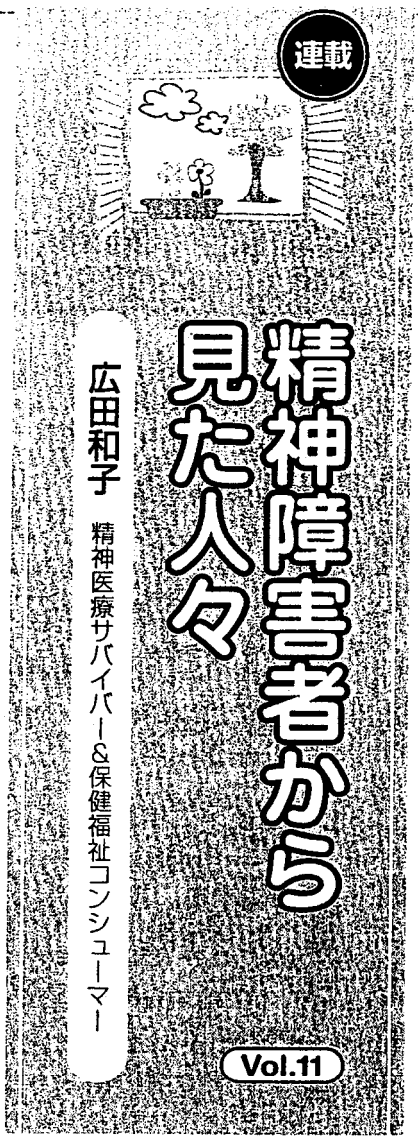
課長は「政府公報番組に六ツ川交番が映ることを署長が了解しました」と手短に言った。小倉さんは、その日、5時間ぐらい一緒にいたが、しみじみと「実は最初にこの番組のことを厚労省に話した時、Kさんは〝精神障害者の美術展〟を推薦されたのですが、私は、何か言いたい人を紹介してくださいと依頼しました」と言った。当時の厚労省精神保健福祉課には、広報番組に美術展を主張するKさんと〝精神障害者のスポーツ大会〟を主張するNさんが同室内にいた。

「きちんと言いたい人の代表で出るのであれば、…いい編集にしてくださいね」と私が言うと、小倉さんは「もちろんです。収録前にアナウンサーにも○○病院を見せたい」と答えた。

わずか数分の私の番組出演の中で、私が活動をしている中で感じていて、多くの人々に話していた課題が盛り込まれたこの番組のビデオを私は今でも大学での講演などで使っている。

ひろた かずこ

かつて私は主治医に“文章を書くのが好き”と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。



神奈川県／大学教員　長瀬　修さん（46歳）

91〈平3〉年2月。のちにクリントン政権の運輸省高官となった車イスを利用していたマイケル・ウインターの講演会が横浜で開催され、「障害を持つアメリカ人法（ADA法）が成立したが、この法律は、時の大統領選挙を左右した…」とマイケルは誇らしげに語った。

そして、マイケルが「メンタル…」と話した時、体が震えるほど感動した。その時点でわが国では精神障害者が障害者として認知された法律はなかったから。また、ADA法はコンシューマーがサービスを拒否する権利を保障していることを知り、〝アメリカに行きたい〟と思った。

当時の私は88（昭63）年3月に医療ミスの注射をうたれ、その副作用のため家庭生活不能になり緊急入院した辛い体験を、精神障害者を取り巻く業界の人に訴えていた。病院を退院後に1年間通所した作業所でも、大人の集団とは思えず、これはおかしいと感じていた。

その体験がADA法に魅せられた理由だった。作業所を出て、零細企業のA社で4か月、B社でパートタイムで働いて、あらためて〝あの作業所のやり方では社会で通用しない〟と思った。

チャンスはやってきた。91〈平3〉年夏。全家連関係者に10月にアメリカのセントルイスで開催される日米障害者協議会（以下、協議会）へ推薦され、同じ患者会の仲間と2人で日本側精神障害者の代表になった。

そこで出会ったのが、協議会の日本側代表者であった八代英太議員秘書で協議会事務局を担っていた長瀬さんだった。私は協議会代表の打合せの時、「…生活保護制度のコンシューマーで、福祉事務所から『渡米中の食事代をカットする』と言われ、話し合っている」と話した。

すると長瀬さんは八代議員秘書として福祉事務所へ電話を入れた。そのことを知った私は「あなたはなぜ電話をしたの？」と聞いた。長瀬さんは「広田さんは精神障害者なので、福祉事務所との関係で疲れると、セントルイスへ行けなくなっては困ると思って…」と言った。私が「それはよけいなお世話よ！…」と強く言うと、長瀬さんは「…すみません」と謝った。

とはいうものの「薬をのんでも音がすると眠れない障害」のある私に、ホテルの同室者は一日遅れで参加してくる人にしてくれたり、といろいろ配慮してくれた。おかげで本当に楽しさと共に中味のある10日間の研修ができた。

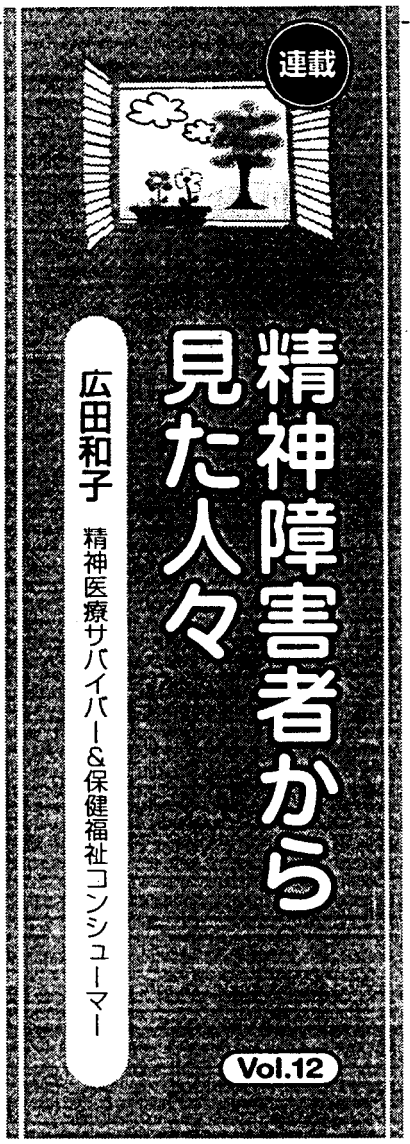
翌年から長瀬さんは国連職員に転出してオーストリアのウイーンへ。そしてニューヨークへ。94〈平6〉年には、オランダのハーグへ留学に…。そのつどマレーシア国籍をもつ奥さんと2人の娘さんと一家でお引っ越し。

95〈平7〉年夏。アイルランドへ研修に行った私が、帰りにハーグの長瀬さん宅を訪ねると「時間があれば、アウシュビッツを案内したかった」と言われた。その年の年末、帰国した長瀬さん翻訳の『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』が翌年夏に出版され、3500円という高値だがロングセラーになっている。

長瀬さんは大学卒業後、3年間ケニアで青年海外協力隊員として日本語を教えていたが、今は東大の助教授として障害学を学生に教育している。来年の3月で契約が終了するが、次なる就職先はまだ決まっていないとか。長瀬さんの豊富なキャリアが生かされる新たなるフィールドが見つかることは、日本の障害者にとっても、教育界にとってもかけがえのないことだと思う。

ひろた かずこ

かつて私は主治医に“文章を書くのが好き”と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。



神奈川県／地域警察官 北見 務さん（54歳）

89〈平元〉年5月3日、作業所に通所していた当時、大家さんの都合で母と2人、横浜市南区大岡から区内六ツ川一丁目の山の上の一軒家に引っ越した。88〈昭63〉年に医療ミスの注射をうたれて以来、薬をのまないと一睡もできず、薬をのんでも音がすれば眠れなくなってしまった私にとって、とてもいい環境だった。

家と京浜急行弘明寺駅の途中に南署六ツ川交番がある。この交番勤務員との出会いは14年前のこと。他県から私を訪ねてきたA子さんに「私は対人恐怖症なのでお店に入れない」と訴えられた時、運よく交番があいていた。そこで、2人で向き合いA子さんの話を聞いていると、後ろから男性の声で「何しているの？」と質問された。振り向くとお巡りさんだったので、「彼女が対人恐怖症で…お借りしています」と答えた。お巡りさんに「お借りするのはいいけれど何時まで？」と言われ、初めてこういう場合に交番をお借りできることがわかった。

99〈平11〉年、山の上の家を引っ越さなければならなくなった。六ツ川交番での待ち合わせが多くなり、なくてはならない存在だったのと、商店の人々ともいい関係ができていたので、この地区で家探しを不動産屋の小林さんに依頼し、今の広い家に8月28日に引っ越した。

家が大きくなり、相談者が泊まれるようになったことで、その人たちも六ツ川交番へやってきた。ある時は、泣きながら「先生から…おまえなんて死んでも仕方ないと言われた」というB子さんのSOS電話を出先で受けた。私は「じゃあ六ツ川交番で待っていて！」と言って電話を切り、六ツ川交番へ電話を入れて「今、泣きながら若い女の子がそこへ行くけど、入院の必要はないから、おいといて！」と言った。私が交番についた時、B子さんは笑顔だった。家につくと「お巡りさんたちに先生から言われたことを話したら『人は年がくれば死ぬんだから、気にするな…』と言われ感動した」と言った。

00〈平12〉年8月7日午後、私は「厚生省へ行ってくる…」と北見さんに言って出かけた。夜、C子さんからせっぱ詰まった電話が入り、私の家の近くに居るとのこと。帰宅してC子さんの話を聞いたら「六ツ川交番に行ったら、北見さんが『広田さんは1時間前に厚生省へ行ったので、当分帰れないと思うから、お茶でも飲んでいたら』と言われたので『お茶を飲むお金がない』と答えたら『駅のそばに図書館があるから、あそこならタダだよ』と教えてくれて助かった」と話した。そして「どうしても家に帰りたくない」と言って、我が家へ泊まった。

北見さんは県警音楽隊の出身で40代後半になって六ツ川交番に配属されてきた。見かけは柔だが、常に誠実で正義感が強く、私が嫌な体験をした時など勇気づけられた。北見さんのような交番勤務員が日本の安全の要だと私は思う。かつて六ツ川交番勤務者は3日に1度の勤務で合計6人いたが、現在は人数も減り、多忙を極め、食事もとれない有様が現状である。

01〈平13〉年3月25日。日本テレビ放映の政府広報番組〝さわやかニッポン〟に私が出演した時、六ツ川交番の前でアナウンサーと私が話すシーンと共に「交番のお巡りさんたちは、広田さんの活動を理解し、力になってくれているそうです」というナレーションが流れた。これは小倉ディレクターのアイデアだが、六ツ川交番勤務員は私の危機介入相談活動の理解者。

ひろた かずこ

かつて私は主治医に"文章を書くのが好き"と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。